

多文化社会を生き抜くスキルを身につける ために～学習支援方法を考える～

群馬県邑楽郡大泉町立西小学校 校長
山田 恵美子



転出入状況

ある年の2月、9名の児童が新たにやって来て、本校での学習を希望した。3名は転入、6名が編入である。と同時に3名の児童が退学という形で学校を去って行った。他校ではあまりみられない本校独特の転出入状況の一幕である。

3学期は一年の締めくくりの学期、学級独自のルールに慣れ友達関係も深まっていく。このような時期に新たに入った9名の児童はスムーズにクラスに溶け込むことができるだろうか？ 転入の3名はまだしも編入の6名はとても厳しい状況である。なぜなら転入は、他の小学校からの異動、編入は外国人学校や本国から直接に日本の学校に入ってくる場合を言い、編入児童は多くの場合初めて日本の学校を体験することになるからである。

希望があれば学校はいつでも受け入れを行っている。担任は突然の受け入れにも笑顔で受け止め、スムーズに教室に誘導する。児童たちも自然に受け入れている。それはかつて自分もそうされてきたことであり、転出入は自然なことなのだ。次の日から肩を組んだり自然に会話をする成り行きを初めて体験した者はその姿に圧倒される。ウエルカムな気持ちや元気はじけるパワーは本校の良さであり、誇りでもある。

り、誇りでもある。

スムーズに受け入れはできたものの、その後の指導はめまぐるしい。一人ひとりのスキルがみんな違う、言葉がわからない、学校ルールがわからないといったように、生活に必要な一つ一つのことにつまづいてしまう。また受け入れの場合、年齢相当の学年に入るので、2年生で学習するかけ算がわからなくても5年生の学齢であれば5年生のクラスに入る。様々な場面で個別指導が必要になってくる。その受け入れをしているのが「日本語学級」である。

学級から取り出して個別指導を行う「日本語学級」

本校の日本語学級は「取り出し指導」が中心である。外国籍児童が在籍するクラスの国語や社会等の時間に、日本語学級に取り出して生活指導や日本語指導・学校のルール、そして教科学習を学ぶ。個別や小集団での指導となるが、県から特別に配置された3名の教諭が担当している。その他に町から割り当てられた2名の日本語指導助手（通訳）がいて、5名で学級を運営している。もちろんこの20年の歴史の中で人的支援も厚くなってきているが、それでもあの2月のような多人数の変

動があると間に合っていない。平成25年度は人事配置によりポルトガル語やスペイン語を話せる職員が増えて、日本語指導助手(通訳)がないときでも多少のことであれば対応できるようになった。また最近ではブラジルからの心理カウンセラーが配置される時期があり、保護者や児童の家族内の問題について解決が図られることが多かった。

日本語学級は、外国籍の児童や保護者への支援が中心であるが、実は在籍学級の担任にとっても大変ありがたい存在である。普段の情報交換の他に「日本語学級推進委員会」で一人ひとりの正しい情報を把握したり、退級判断をしたりする。個々の児童がどの学年のどの分野の学習が抜け落ちているのかを日本語学級で確認して学級担任と共通理解を図っている。この委員会は、分掌組織の中に位置づけられ、年3回開催される。また、日本語学級内では、心理カウンセラー来校時に合わせてケース会議を定期的に行っている。これらの取り組みは、今までの歴史の中で必要に迫られて生まれたものであり、人々の知恵が結集されている。

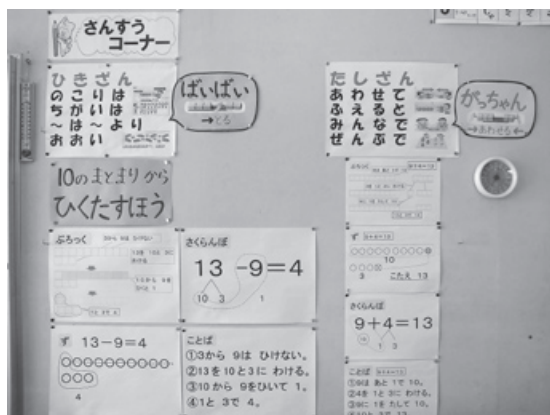
学習言語は難しい？！

「学習言語」って何ですか？ そんな質問をされることがある。生活言語に対しての学習言語である。日常会話がほぼできるようにな

り、ひらがな・カタカナ・簡単な漢字が書けると退級が近づく。また新たに入ってくる児童が多くなると、中途でも退級となってしまう。

退級した児童は、在籍学級の中でどのように学習しているのだろうか？ 外国籍児童の立場で見ると、在籍学級の学習は意外と難しい。小学5年生で学習する「三角形の内角の和は180度」、内角の和って何？ 基本の学習言語がわからないとその後の学習はお手上げとなる。「みかん3個とリンゴ4個をあわせて何個ですか？」(小学1年生)―ここで問題になる学習言語があるの？ と思うほど特に難しい言葉はないし、ごく一般的な問題である。ずっと日本で生活している人にはそのつまづきさえ理解できないのだ。「あわせて」という言葉につまづくのである。あわせるのだからたし算でしょ、と考えられる人は「あわせる」という実体験を持っている人である。「A-WA-S-E-RU」と発音はできても意味がわからない。計算式はできるのに文章題になるとできなくなってしまうジレンマ、そんな自分にいらだち、奇声を発する児童も出てくるのである。

これと同じような言葉はたくさんある。「ふえと・付け足す・加える・みんなで・全部で」などである。ひき算を表す表現「ひくと・違いは・残りは・おつりは・分けると」などもつまづきやすい学習言語と言える。日本語表現の豊かさが文章題を解く難しさにつながっているのだ。授業の中では「こんな言葉が出てきたらたし算をするのですよ」と繰り返しアドバイスが行われている。このような支援は外国籍児童に限ったことではなく、日本国籍の児童でも同じような支援を必要としている。外国籍児童のための学習支援は、実は全ての児童の基礎基本に役立つ支援になっていることに気付くのだ。



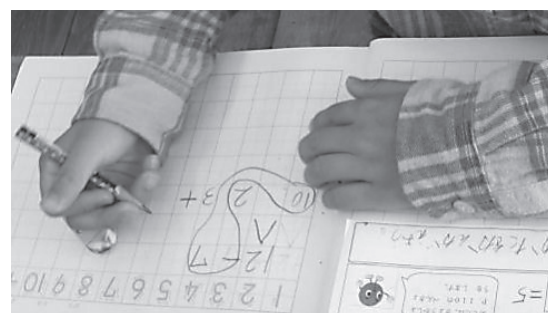
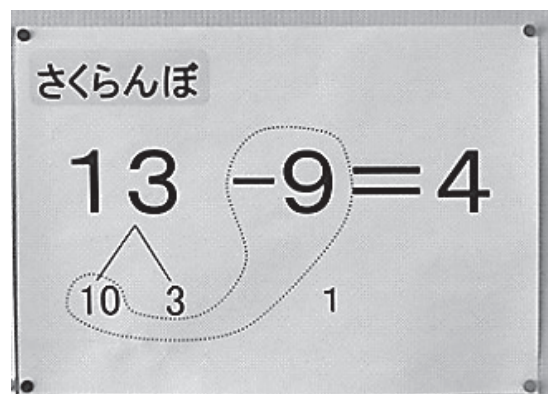
1年生の教室 算数コーナー たしざん ひきざん

学習支援～学習は楽しくリズムをもって～

○たし算・ひき算は擬音語や動作化で覚える、野菜で覚える

「あわせるを動作で表してみましょう」という教師の働きかけに、児童は両手を一つにまとめる動きをしながら「がっちゃん」と一斉に声を発する。「がっちゃんだからたし算です」と児童の声、クラスの約束事としてこの擬音語が共通言語として使われている。クラスによってはがっちゃんではなくてパッチンというクラスもある。この擬音語や動作化は本当に理解するまでの支援なのだ。ひき算は「シュー」や「ばいばい」、中央から片手を横に流して取り去る様子を表す。この方式を指導者が共通理解していると個別指導もやりやすい。「がっちゃんなの、ばいばいの」と動作を交えながら児童に考えさせていく。言葉がおぼつかなくても聞いてわかる、見てわかる情報で自力解決を目指していく。ちょっと考えたり工夫したりするだけでできたという達成感を持たせることができる。小さな達成感の繰り返しは算数好きを育成する。外国籍の場合、家庭学習を徹底させることが非常に難しい実態があるため、授業の中で定着させていく必要がある。そのためには、ここだけはこの重要ポイントを最大限スリム化する教材研究と準備が教師側に求められる。その策の一つとして擬音語や動作化を取り入れているのだ。

「くり上がりのあるたし算やくり下がりのあるひき算」は1年生の中で重要教材。例えば $13 - 9$ を計算してみよう。3から9はひけない。そこでサクランボ算（）の登場。13はサクランボ算にすると10と3に分けられる。10から9をひくために10と9を囲むと、囲んだ姿（）がなんとキュウリ（ヘチマ）に変身。キュウリの中を計算する。ひいた残りの1と3をたして4。やった！ 答えを導き



キュウリを使って計算

出せた。サクランボに分ける、キュウリを作ってひく、最後にたすの過程を経て初めて答えが求められた。いやいやまだほっとしてはいけない。答えを書くときの注意、何を求めているか単位を書かなければならない。児童にとってはとても神経を使うのである。こんな小さな文章題の計算にも落ち着いてしっかり取り組まないと正解を出すことができない。1年生が一生懸命に正解を求める姿は真剣そのものの、サクランボやキュウリ・ヘチマは児童にとっての学習支援野菜なのだ。

○かけ算九九はダンスで覚える、先取り学習で覚える

2学期末の通知表、2年生児童の通信欄には「日本語学級でかけ算の九九算バを教えてもらって楽しく覚えていました。」と記されていた。本校では「九九算バ」という言葉が日常的に使われている。外国籍児童が日本語でかけ算を覚えやすくするために「西小九九算バ」として誕生させたものである。サンバのリズムに振り付けをして、踊りながら九九を唱え

る。実際に覚え始めると簡単どころにもつまずきがあることがわかった。特に1の段が難しい。原因は音便、撥音便「ん」やつまる「っ」の促音便などがスムーズに入っていかない。さらに4は「し」なのか「よん」なのか、7は「なな」「しち」なのか迷ってしまう。1×7（いんしちがしち）などは発音しにくく覚えづらい。このような課題を少しずつ乗り越えながら9の段まで挑戦していく。

完全に暗唱するまでは繰り返しの練習が必要で、特に家庭での練習が欠かせない。しかし多くの児童が家庭での練習が厳しいため、暗唱するまでにはならない。本校ではかけ算の学習は2年生の10月末から12月に位置づけているが、この時期から学習したのでは到底間に合わない。そのため在籍学級の中で外国籍児童が自信を持って取り組むために「先取り学習」を行っている。1か月前から日本語学級の授業の中や休み時間にかけ算九九練習を行う。ダンスをしながら九九を唱えたら、その日の頑張りを認め、次の段への取り組みにつなげていく。単調であるが地道な学習である。休み時間を返上して学習に取り組むので嫌悪感を持つ子どもが出ないか最初は心配したが、児童はダンスを楽しんだり合格シールをもらって褒められたりするので、みんな授業が終わるとすぐに日本語学級にやってくる。日本語学級が家庭の役割を担っている。今年は2年生だけでなく、3年生以上の外国籍児童や日本国籍児童も参加して九九の練習



日本語学級 九九算バを踊る

に励んでいた。要するに、国籍に関係なく、かけ算の苦手な児童が指導を受けているという状況であった。

理解していない単元があれば学年に関係なくそこまで戻って指導をする。漠然としていて理解できなかったところがしっかり指導されると、子どもは輝き、自ら積極的に取り組めるようになる。先取り学習で取り組んだ児童はほぼ全員が授業中に合格することができた。

慣れない環境の中で地道な学習をしていくためには多くの支援が必要である。外国籍児童にわかりやすい支援方法は何かをつきつめていくと、全ての児童に通用する究極の支援となっていた。このような手応えを強く感じながら、「外国籍児童だから…」という概念に縛られず、国籍に関係なく、今後も個々の児童の学習習得状況に応じた個別指導ができるような支援態勢を一步でも進めたいと考えている。

著者略歴

山田 恵美子（やまだ・えみこ）

群馬県邑楽郡大泉町立西小学校校長。高崎市や大泉町の中学校教諭を経て、大泉町教育委員会指導主事となる。指導主事在任中の2002年から2年間、文部科学省国際化推進地域研究の指定を受けて外国人児童生徒の不就学実態調査や研究推進を担当。2004年より大泉町立西小学校教頭をはじめ町内小学校の教頭・校長を経て現職となる。

JIAM研修「地域の外国人児童・生徒への支援セミナー」では地域・学校・家庭を繋ぐ立場から6年間講師として参加。